

# 松浦鏡

世阿弥作

前

ワキ 旅僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 松浦佐用姫

地は 肥前

季は 冬

「もろこし舟の名をとめし。く。松浦は何くなるらん。

「是は行脚の僧にて候。我東国より都に上り。又西国修行と志し候ふ程に。筑紫に下り博多の浦に逗留仕りて候。肥前の国松浦潟は聞えたる名所にて候へば。急ぎ尋ね行き一見せばやと存じ候。

「箱崎や。明け行く空の旅衣。く。げに不知火の筑紫潟。わだの原ゆく沖つ舟。汐路遥かの浦づた

ひ。松浦潟にも着きにけり。く。

「是は早松浦の浦にて候。委しくは知らねども。山の粧ひ海の景色。世に勝れて面白く見所多く候。折節雪降りて山河草木色めきたり。あれに釣人の見えて候。立ち寄り此処の有様尋ねばやと思ひ候。松浦潟。浦山かけて降る雪の。波も曇るや汐煙。渚に拾ふ玉島の。川風さゆる袂かな。

「玉島の。此川上に家はあれど。さながら浦に住居

して。誰としもなき釣の糸。波より汐に引かれて。

身は浮舟の友千鳥。跡も渚に通ひ来て。海士乙女  
等が麻衣。しほたれなるゝばかりなり。

下歌 「袖とふ風も折々の。便りなりけり松浦潟。

上歌 「ながめよと。思はずしもや帰るらん。く。月

待つ波の海士小舟。心なき身にだにも。ながめは  
多きけしきにて。かゝる思ひの有るぞとも。知ら  
で慰む夕べかな。く。

ワキ詞

「如何に釣人に尋ね申すべき事の候。是は遠国の沙  
門なるが。抖擻行脚に是まで来りたり。是は名に  
きゝし松浦潟候ふよなふ。

シテ

「さん候此浦は古へよりの名所なり。海山川に至る  
まで。名に流れたる名所にて候ふ御尋ね候へ。

ワキ

「是なる流れをば何と申し候ふぞ。

シテ

「是こそ松浦川にて候へ。此湊にては佐用姫も。鏡  
を抱きて身を投げゝるとかや。其魄霊残つて今も

鏡の宮とかや。参りて拝ませ給へとよ。

ワキ  
「げにく松浦の鏡の宮とは。佐用姫の靈魂なるべし。さてあの雪の積りたるは。松浦山候ふか。

シテ  
「あれは松浦山いきん山と書いて。ひれふる山と読むなり。抑此山をひれふる山と申す事は。昔し狭手彦と言ひし人の。君の宣旨に従ひて。唐使の舟出せし時。佐用姫と聞えし遊女。舟の跡を慕ひ。あの山の上に登つて。沖行く舟を見送りつゝ。衣

の領巾を上げ袖をかざして招きしが。舟影遠くなるまゝに。招き呼ばりて臥しまろびしを。ひれふる山とは申すなり。然れば古人山上の憶良がよみし詠歌にも。海原の沖ゆく舟を帰れとや。ひれ振らしけん松浦佐用姫。

地  
「げにや今見るも。ひれふる雪の松浦山。く。跡を知れとやよみ置きし。其歌人の名を聞くも。山の上の憶良なれば。ひれふるとよむ歌の。よみ人

知るも面白や。さぞな詠めせし。沖つ波間に行く  
舟の。絶々なりし古へも。今に知らるゝあはれか  
な。く。

ワキ詞

「嬉しくも謂ども承り候ふ物かな。とても御事な  
らば。佐用姫狭手彦の御謂れをも委しく御物語り  
候へ。」

シテ

「さらば語り参らせ候はん。」

クリ

「抑ふるき世語を。語るに付けて身の上に。麻生の

松原待つ事の。猶あり顔なる世の中なり。」

サシ

「昔し上代の事かとよ。狭手彦と言ひし遣唐使。」

地

「大君の勅に随ひて。此松浦潟に下り。暫しの旅宿  
有りし時。国の采女の色に染む。花の香衣袖ふれ  
て。宿も一夜の仮枕。」

シテ

「あだし契と思へども。」

地

「幾夜の数とも知らざりけり。」

クセ

「其名を。佐用姫と聞くからに。小夜の寢覚の睦言

も。尽きぬ心の程見えて。山風吹き行く松浦渚。  
心づくしの秋なれや。木の間の月もほのかなる。  
朝顔朝寝髪。打ちとくる共寝なりけり。かくて  
契りも程経るや。時節も早く日頃経て。唐舟の纜  
を。解くや吉き日の門出とて。直に旅宿を出で給  
へば。

シテ「佐用姫いつしかきぬぐの。

地「恨みをそへて松浦渚。前の渚に立つ波の。声も惜

しまず鳴く田鶴の。蘆辺にさすらひ松が根の。磯  
枕草薙。しきりに臥し沈みつゝ。れいきん山にあ  
らねども。こゝもひれふる有様を。松浦姫といは  
れしも。佐用姫が異名なり。げに恥かしき世語り。  
ワキ「げにくれいきん山の謂れ委しく承り候ひぬ。さ  
て此鏡の謂れ何事にて候ひけるぞ。

シテ「此鏡は狭手彦の置きし形見なり。其後神とは現れ  
給へども。誠の鏡は御神体なり。如何に御僧。わ

らは、受衣の望み有り。其御袈裟を授け給へとよ。

ワキ

「始めより様ある人と見えつる上。受衣の望と承るは。やすき間の事なりとて。此袈裟を授け奉れば。

シテ

「わらは、御袈裟を授かりつゝ。掌を合はせ座をなして。善哉解脱ふくむさうふく。てんえいふにかいらいきやうくわう。としよじゆしやう。

地

「げに有難き法は得つ。此御布施は狭手彦の。形見の鏡を見せ申さん。暫く待たせ給へとよ。誠は我

は佐用姫が。れいきん山に澄む月の。雲隠れにぞなりにける。く。(中入)

ワキ

「始めより不思議なりつる天乙女。かの小夜姫の幽霊かや。いざや今宵は浦に伏して。教への如くもしは又。彼神鏡を拝むやと。

歌

「夜もすがら。月の真澄の水鏡。く。影を移すや松浦川。緑の空もさえ渡り。風も更けゆく旅寐かな。く。

後ジテ

「恋は山。涙は海となるものを。又いつの世を松浦  
湯。人知れず袖に涙の騒ぐかな。」

一声

「唐舟も寄せやせん。」

地

「西に山なき有明の。」

シテ

「松浦の朝日鏡のおもて。」

地

「向ふ光も心曇らば。我影ながら恥かしやな。」

シテ

「行く年の惜しくもあるかな増鏡。見る影さへに暮  
れぬと思へば。」

ワキ

「不思議やな此神鏡を拝すれば。向ふ面は移らずし  
て。さもなまめける男体の。冠正しき面色なり。」

こはそも如何なる御事ぞ。

シテ

「恥かしや其執心の報えばこそ。契りも早く狭手彦  
の。恨みは猶も増鏡に。形を残して捨てやらぬ。」

恋慕の罪に沈めとや。

ワキ

「是は愚の御事かな。煩惱即菩提心。其一念をひる  
がへし。はやく仏果を得給ふべし。」



シテ「承り候ふ去りながら。今宵一夜の懺悔を晴らし。  
昔の有様見せ申さんと。

ワキ「いふかと見れば沖に出づる。唐舟に時移る。

シテ「声は波路に響き合ひて。

ワキ「松浦の川瀬。

シテ「和の汐合。

ワキ「千鳥。

シテ「鷗の。

ワキ「立つけしきに。

地「海山も震動して。く。心も暗れてひれ臥すや。

地によつて倒れ。地によつて立ち上り。跡を見れば。舟は煙波に遥なり。せんかた並木の。松浦山の上に。登りて声を上げ。

シテ「なふ其舟しばし。

地「其舟しばし留めよくと。白妙のひれを。上げては招き。かざしては招き。焦れ堪へかねてひれふ

る姿は。げにもひれふる山なるべし。

シテ「世の中は。何に喩へん朝ぼらけ。漕ぎ行く舟の。  
跡の白波そのまゝに。狂乱となつて。

地「狂乱となつて。れいきん山を下りて。磯辺にさす  
らひけるが。形見の鏡を身に添へ持ちて。塵を払  
ひ影を移して。見る程にく。思へば恨めし形見  
こそ。今はあだなれ是なくはと。思ひ定めて海士  
の小舟に。こがれく出で。鏡をば胸に抱き。

身をば波間に捨舟の。上よりかつぱと身を投げて。  
千尋の底に沈むと見えしが。夜も白々と明くる松  
浦の。浦風や夢路を覚ますらん。浦風や夢を覚ま  
すらん。